
Absolute Zero 2nd

DoubleS

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Absolute Zero 2nd

【Nコード】

N4900Z

【作者名】

Doubles

【あらすじ】

冬休み前に降りかかってきた問題をなんとか解決して、三条霧矢は家に帰ってきた。しかし、またしても問題が起こる。魔族がらみのトラブルにまた巻き込まれた霧矢のクリスマスはどうなるのか？

帰ってみれば怒る腐女子あり（前書き）

この小説は Absolute Zero の続編です。未読の方はまず先に前作を読まれることをお勧めします。

帰ってみれば怒る腐女子あり

十二月二十二日 土曜日 晴れ時々雪

「きいりいやああああ……」

「さあんじいよおお……」

昼ごろに家に帰った三条霧矢は二人の友人に詰め寄られていた。

「あたしたちを置いて行くなんでどういうこと！」

二人とも指をバキバキと鳴らしている。霧矢は冷や汗を浮かべながら後ずさりした。

「ちよ、ちよつと、落ち着け……二人とも……」

「うるせえ！ 黙れ！」

「とりあえず死になさい！」

「ぎいやああああ！」

薬局に悲鳴がこだまする。

二人が怒っているのには訳がある。霧矢が二人を置き去りにして物事を解決してしまったからだ。もつとも、この二人も霧矢が誘っても起きようとせず寝落ちしたのだが。

よってたかつて霧矢を袋叩きに行っている二人の名前は、上川晴代、西村龍太という。

「霧矢、焼き殺される前に何か言い残すことは？」

晴代の右手が赤く光る。

上川晴代は本来、何の変哲もない女子高生だったが、魔族という異世界からやってきた存在と契約を交わしたことで、火の属性の術を操ることができるようになった。具体的には手で振れた物体を数千度まで熱することができるというものだ。

ちなみに、西村龍太は特に契約を交わしていないため、何の能力

も持たない。霧矢も同様である。

「ちよっ！ 契約異能はマジでシャレにならないって！」

「黙りなさい。風華ちゃんに会おうと思っていたのに、ここにいないし、雨野先輩も有島先輩もないじゃない……」

こめかみに筋を浮かべながら、晴代は近寄ってくる。彼女の右手では空気が熱せられてゆらめいている。

「霜華！ 何とかしてくれよ！」

霧矢は助けを求めるように、脇に立っている和服を着た少女に懇願する。彼女の名前は北原霜華といい、魔族と人間のハーフである。水の力を操り氷の術が使える、自称半雪女である。

「……まあ、晴代もそこまでにしてあげたら？」

「……霜華ちゃんがそういうのなら……まあ勘弁してあげるわ」

霧矢は息を吐き出した。命を取り留めてほっとしている。

北原霜華は一見、温和な女の子として振る舞っているが、実は冷血無慈悲な存在として魔族の中では恐れられている。殺した魔族は数知れず、その冷酷さから絶対零度 アブソリュート・ゼロ という通り名まで持っている。しかし、そのことを知っているのは、こちらの世界では霧矢と彼女の妹である風華、そして光の魔族のハーフであり、霧矢の先輩で生徒会副会長、有島恵子だけだ。ちなみ彼女が晴代の契約魔族である。

向こうの世界で魔族が際限なく繰り広げる内戦による殺戮に辟易して、霜華はこちらの世界にやってきた。そして少し遅れて妹の風華もやってきた。

ちなみに、風華は偶然、有島の親友である生徒会長、雨野光里と契約した。そして霧矢にはなついていない。といっても、出会ってからまだ半日くらいしか経っていない。

とはいっても、風華は同じく出会ってから半日くらいしか経っていない雨野に対してあり得ないほどなついていて。霜華以上かもしれない。

「ところで三条。結局、護は目覚めたとしてこれからどうするのだ」
固い口調でしゃべる眼鏡の女が一人霜華と一緒に立っていた。
彼女は木村文香といって、霧矢の通う県立浦沼高校の科学部員だ。
晴代の親友で霧矢も中学校の時から彼女とは面識がある。

ただし、人に対して毒を盛ったり、対人兵器を開発したりするのが難点である。

「……どうするって言うてもな……それは会長が決めることだろう」
雨野には護という弟がいて、彼は長い間眠り続けていた。それが
発端で霧矢たちはいろいろと面倒事に巻き込まれていた。つい数時
間前に風華との契約異能で雨野が彼にかかっていた呪いを解いたの
だが、それに際して、晴代と西村の二人を完全にスルーする形にな
ってしまったので、こうして詰め寄られていたというわけである。

「とりあえず、風華に会いたいなら、もうしばらくしたら来い。昼
になったら帰ってくるだろ」

「……きいりいやぁ……」

イライラした視線で晴代は霧矢を凝視している。霧矢は無視し、
エプロンを身に着けた。

「とりあえず、遅れたけど復調園調剤薬局は営業開始。用がないな
ら帰れ」

レジカウンターの椅子に霧矢は腰を下ろした。しかし、晴代は霧
矢に詰め寄ってくる。

「ねえ、あたしへの感謝の気持ちはないわけ？」

「ない」

「あ、そう……」

霧矢が無表情で即答したため、晴代の怒りは沸騰した。再び、右
手が赤く光る。

「霧矢、もう一度だけ聞いわよ。あたしへの感謝の気持ちはないの
？」

霧矢はため息をつく。霧矢としては、ちゃんと誘ったのに眠いと言って断ったのは誰だという思いが強かった。

「焼き殺される前に、逆に聞くぞ。もし僕を焼き殺す気なら、霜華と西村の二人にお前の秘密を全部ばらすぞ。それでもいいのか？特にこの前の日曜日のことか」

晴代がギクリと動く。二人は何のことやらと首を傾げた。

「……そ、それは……」

このことは学校では霧矢と文香しか知らない。

上川晴代は重度のオタクである。いや、授業中に漫画の男性キャラと男性キャラを組み合わせる妄想を繰り広げるほどである。詳しくは霧矢としても説明したくない。

「用がないなら帰れ。風華が帰ってきたら連絡するから」

客向けのおまけのポケットティッシュを投げつけると、霧矢は新聞を広げた。晴代は震えている。

「霧矢のバカアアア！」

涙ぐみながら、晴代は乱暴に店の戸を引くと駆け出して行った。

霜華は啞然として銀色の道を走り去る晴代を見ていた。

「なあ、三条。上川の秘密って何なんだ？」

「それは聞かないであげてくれと、親友として頼みたい」

文香が残念そうな表情を浮かべて、西村の問いを遮った。丸眼鏡が太陽の光を反射して、白く光っている。

「で、どうするんだ。お前ら。お前たちは晴代と違って家は遠いから、会長が帰ってくるまでどうやって時間を潰す気だ？それともう帰るのか？」

新聞の一面記事を眺めながら霧矢は問いかける。

「俺はそろそろ帰るぜ。一応一通りの事情は知ってるしな」

リュックを担ぎ、「よいお年を」と言うと西村は店を出て行った。

しかし、文香は残りたいらしい。霧矢も別に構わないので適当に座って待ってもらうことにした。

「霜華、お前、今日は休んでいいぞ。たまには僕がやっておく」
霧矢の言葉に霜華は意外そうな顔をする。

もともと、霜華はこの家の居候なのだが、それではいろいろと不都合なので、薬局の店員としてアルバイトをしている。霧矢としては反対したが、母親にして店長にして薬剤師である理津子の評価は上々であり、町の老人や子供たちの人気もなぜかやたらと高く、薬局の看板娘として定着しつつある。

「いいの？ 霧君一人で？」

「別に土曜日にはそれほど客は来ない。もともと母さんだけでもこなせるくらいだ。この三連休の間はゆっくりしててもいいぞ」

隣の内科・小児科診療所では、平日こそ老人や小さな子供でこつた返しているが、土曜日は数人の成人の患者がいるくらいでそれほど混み合ったりはしない。

もともと、若者の少ない町であり、若者は医者にかかるときは、それなりに賑わっている隣町までドライブがてら行くことが多い。特に土曜日は帰りに大型量販店でゆつくりと買い物もできるのでなおさらだ。距離も十数キロメートルで、車ならそれほど時間はかからない。電車なら二駅、十分ほどで行ける。まあ、その近さがこの商店街をますます寂れさせているのだが。

「じゃあ、お言葉に甘えて」

ソファーに座りながら、待合客用の備え付けてある雑誌を読んでいる文香に霜華は耳打ちする。文香はうなずくと、脇に置いてあったコートを取った。

「すまんが、出かけさせてもらう。世話になった」

文香は霧矢に頭を下げると、コートを羽織って外に出て行った。霜華もそれに続く。

「おい、どこに行くのか？」

霜華は首を縦に振ると「晴代の家」とだけ答えて、そのまま店か

ら出ていく。

「……相変わらず、薄着で出かけやがって」
霧矢はぼそりとつぶやいた。

霜華は氷使いで、しかも半雪女と自称するだけあって、寒さにはありえないほど強い。氷点下の中、薄手の着物やブラウス一枚にスカートで平然としているほどだ。

それはそれで利点なのだが、この寒い中、他人から見たら嫌でも目立ってしまうという短所もある。

「……まあ、いいか」

霧矢は新聞のページをめくった。

クリスマス前の平穏と不穏 1

「おじゃましま〜す！」

霜華と文香がやってきたのは、喫茶・毘沙門天の裏にある民家だった。

「ああ、霜華ちゃんと文香か。いらつしゃい。上がって」

表札には上川と書かれている。そう、晴代の家である。相当昔から建っている霧矢の家とは違って、わりと新しい木造の家だ。

「霜華ちゃんがあたしの家に来るの初めてだよね？」

霜華はうなずく。キョロキョロと家の中を見回すと、やはり霧矢の家とは違って洋風づくりだ。居間は、畳にこたつではなく、フローリングにテーブルだ。

「あたしの部屋は二階だから、付いてきて」

「晴代。きちんと片付けてあるのか？ この前、私が来たときはひどかったのだが」

うつ！ と文香の言葉に晴代は固まる。少し焦ると、晴代は苦し紛れに言葉をひねり出した。

「えっと…… 十分だけ、リビングで待っていてくれない？」

「やはりそうなのだな。予想はしていたが」

眼鏡越しに突き刺すような視線を向けられ、晴代はうろたえる。

ドタバタと階段を上っていくと、乱暴にドアが閉まる音が聞こえた。

「やれやれ……」

文香は腕組みをしながらため息をついた。いつものことなのだが呆れてしまうのは変わらなかった。これもいつものことだが。

「晴代って片付けられない人なんだね……」

「まあ、それを否定することはできない。昔は片付けを手伝わせるためだけに呼び出されたこともしょっちゅうだったが。今は、少しはましになった」

リビングの方に文香は歩き出す。霜華も続いた。

「ところで、私は昨日のことはよく知らないのだが、結局、リリアンの件はどうなったのだ？」

リビングのソファーに遠慮もなく腰掛けた文香は、霜華にも座るように勧めながら尋ねた。霧矢も文香に対してはあまり説明していなかったようだ。

「えっとね。何とか追い返したよ。霧君がやり過ぎた感じもしたけど」

「三条はいったい何をしたのだ。やり過ぎるとはいえ、相手は魔族だったのだろう？」

文香はポケットから手帳を取り出した。やはりメモ魔は何でも記録したがるらしい。

「魔族じゃなくて、契約主だったみたいだけど……えっとね、霧君が変な煙玉みたいなものを使ったら……トラウマを呼び覚ましちゃったみたいで、パニックを起こして倒れちゃった……」

リリアン・ポーンというのは、霜華と晴代を狙って襲ってきた女のことだ。昔、カルト教団に殺された家族の復讐をしようと、協力者となる魔族や契約主を探していて、もはや自暴自棄になって霜華たちを襲ってきた。

霧矢・霜華・有島の三人で退けたが、運が悪ければ、霜華は彼女と彼女の契約魔族、エドワード・リースを殺さなければならなかった。

「おそらく、その煙玉は私が作った催涙煙幕だ。三条に万が一の時は使えと預けておいたのだ」

「へえ。文香が作ったんだ。でもあれ爆発しちゃったし、何でできたの？」

「爆発？」

文香がキョトンとした表情を浮かべた。あくまで催涙ガスと煙幕の両用を目指したものであって、殺傷用の爆弾を作ったわけではない。

「うん。黒い煙がもうもうと立ち込めたかと思ったら、リリアンが炎の剣を使ったら爆発しちゃった。それで霧君は思いつきり吹っ飛ばされたし」

霜華が首を傾げながら文香に尋ねた。文香は手帳の数ページ前をめくって考える。

「……なるほど。大体つかめた」

「何だったの？」

「おそらく、煙幕に入っていた炭素粉と可燃性ガスの混合気体に、火の剣が引火して発生した粉塵爆発だろう。まさか、相手が煙幕の中で火を使うとは……予想外だった」

手帳に書かれた煙幕の設計図を霜華に見せながら説明する。

「へえ、こつちの世界はそうやって武器を作るんだ」

「まあ、基本的に人間は異能を使えない。だから自然科学に頼るしかない。そうやって兵器も生まれてきたわけだが、殺し合いのために科学が発展してきたというのは嫌な話だ」

「殺し合いか……」

霜華は暗い表情を浮かべる。文香は突然の霜華の悲しみの表情に困惑した。

「どうかしたか？ まあ、粉塵爆発を除けばこれで人が死ぬことはないが」

霜華は窓から外を見た。穏やかなこちらの世界は殺し合いが日常的に行われることはない。リリアンのように、たまに誰かが殺されたりすることもあるが、基本的には平穏な世界だ。

そして、霧矢は散々人を殺してきた自分でも、こつちの世界に居場所があると言ってくれた。昔、向こうが穏やかだったときにも、こつちの世界にちよくちよく遊びに来ていた。風華へのプレゼントを買ってあげたり、好きなものを買ったりしていた。

もっと早くこつちの世界に来るべきだった。そうすれば、自分が手にかけてきた相手の数は、少しは減っていただろう。

そう考えると後悔が自分を襲う。殺戮は避けることができたので

はないかと。

「どうした。気になることもあったのか？」

文香が心配そうな声で霜華の顔を見る。彼女は霜華が多くの人を手にかけてきたということを知らない。知っているのは霧矢・有島・風華だけだ。

「何でもない。ちょっと疲れてるだけだから」

霜華の言葉に、文香はふむ、とうなずくとそれ以上は深く追及しなかった。

外の通りを見ると、町の外れにあるスキー場へと向かうタクシーや徒歩のスキー客が目立つ。この商店街はもとも温泉街で、山もあるので冬ならばスキー客でそれなりににぎわう。そのかわり、春・夏・秋はまさに田舎町そのものとなる。

ここ、浦沼とはそういう町らしい。山に囲まれ、田んぼが町を占める典型的な田舎町だ。

「今日はスキー日和だが、この日差しの強さだ。雪目になる人が出るかもしれない」

文香も観光客を眺めながらつぶやく。純白の雪に反射された紫外線に目を焼かれるとかなり痛む。すぐに治るが治るまでが相当痛い。霧矢は前に話していた。霜華は半雪女であるが、スキーの経験はない。むしろ、雪の上でも土の上と同じくらいのスピードで走れるので必要もなかったことが多い。

「晴代ってスキーが大好きなんだよね。この前、スキーウェアでうちに飛び込んできた」

「そうだな。中学校時代はスキーで晴代の右に出る者はいないとも言われたくらいだが…」

文香の話では、ゲレンデでの晴代の性能は異常らしく、空中一回転のモーグルも軽くやってのけるそうだ。

「もはや、晴代はスキー中毒と言ってもいい。週に必ず一回は滑ら

ないと禁断症状を起こす。リフトの駆動音を聞くとうずうずしてくるらしいな」

クスリと笑って文香は冗談を言った。居間の机の上に置いてある定期券のパスケースのようなものをヒョイとつまみ上げた。

「やはりな。市内共通のシーズン券まで買っている」

魚沢市内スキー場シーズン共通リフト券と書かれたカードの名前欄には上川晴代という署名がある。魚沢市は浦沼町や浦沼よりさらにド田舎なその他の村との合併を繰り返した結果、面積だけはだだっ広く、人口密度だけが極端に小さくなってしまった市である。

「それにしても、浦高の冬課題の量は割と多いのに、スキーなどしている暇はあるのかどうか」

「え……？」

「私ならば、今年中に終わらせられるが、先週の晴代の様子を見たのならわかるだろう。彼女には毎日かなりの時間を費やしても終わらせられるかどうか……」

文香はため息をつく。文香は学年で片手に入る秀才だが、晴代は下から数えた方が早い。ちなみに、霧矢は平均より少しだけ上である。

「まあ、何とかなるんじゃないのかなあ」

「そう祈りたいが、毎回、長期の休みの終わりごろになると私が呼び出されるのはお約束となっている。中一のころからずっとだ」

苦々しい顔を浮かべて、文香はリフト券を机の上に戻した。霜華は苦笑いする。

「それにしても、晴代は趣味と勉強の比率を考え直した方がいいと私は思う。私としては三対七くらいが良いと思うのだが、今の晴代は九対一だからな」

「スキーだけにそんなに費やしているの？」

文香は言葉に詰まり黙っている。霜華としてはなぜ黙っているのかは理解できなかった。

「まあ、スキーだけじゃなくて、他にもまあいろいろな趣味がある

と、そういうことだ」

それ以上は聞かないでくれ、と文香は遮った。

「お待たせ。片付け終わったよ！」

晴代がドタドタと騒がしく二階から降りてきた。

「やっと終わったか。だから、あれほどこちんと部屋は片付けておけと言っていたものを」

「説教はいいから。さ、上がって、上がって」

文香の小言をさらりと流し、晴代はうきうきと二人を引き連れ階段を上って行った。

クリスマス前の平穏と不穏 2

「ありがとうございます。お大事に」

霧矢は店から出ていく客に頭を下げた。時計を見るとそろそろ昼時だ。霜華を呼び戻そうと思ったが、おそらく、昼は晴代の家で食べてくるだろう。無理に呼び戻す必要もないと考えた。空腹は大したことなかったが、昨日の疲れで体力はかなり消耗していた。

霧矢はカウンターに置いた冬休みの宿題を睨みつける。自分でリストを作ったが、一日五時間以上やらなければ、確実に終わらない量だ。

(……晴代のやつ、大丈夫なのか?)

文香と同じ懸念を浮かべながら、霧矢は英語の読解課題を開く。英字新聞の記事を全て訳して来いというふざけた内容だ。一通り眺めてみると、経済がらみの内容のようだった。

「これはいじめだな……」

独り言をつぶやいていると、店の扉が開く。無精ひげを生やした男が入ってきた。

「いらつしやいま……せ……?」

「おはよう。三条……」

「せ……先生……どうしたんです。こんなところに……」

この男は松原陽介といって、県立浦沼高校の生徒会顧問で霧矢と晴代のクラスの数学を担当する教師だ。教え方や人柄は悪くないのだが、だらしない上に、年の割にはいろいろと親父くさいというところで、生徒からの評判は良い意味であまりよろしくない。

「昨日からどうも調子が悪くて、隣で見てもらったんだが……インフルエンザだと言われた」

霧矢は身構える。普通の流行性感冒は少し前にもう引いたので免疫ができているが、残念なことに、今年はインフルエンザの予防注射をしていない。

しかも、あり得ないことに、松原先生はマスクも何もせずに薬局の中で咳をしまくっている。霧矢は顔をそむけながら、処方箋を受け取り、母親を呼んだ。

「インフルエンザはわかりますけど、何か先生酒臭いですよ」

「昨日、休みに入ってたことで、先生たちで飲み会だった。飲み過ぎてまだ頭痛がする。しばらくの不養生がたたったみたいだな」

霧矢たちがリリアンとの死闘を繰り広げていたちようど同じ時刻に、先生たちはのんきに酒盛りをしていたらしい。寒空の中、へべれけになって帰っている途中に、インフルエンザが発症したということだろう。

彼はこの商店街の近くにあるアパートに住んでいるとだけ聞いたことがある。そして、この商店街のとある割烹は、浦沼高校御用達となっていて、地域の経済に先生たちは貢献している。

「自業自得ですよ。体調が悪いなら飲み会なんて行かなきゃいいんです。それと咳き込むならまわりにうつさないためにも、きちんとマスクをしてください」

さりげなく、霧矢はカウンターにマスクの箱を置く。商売上手め、とつぶやくと財布から小銭を出した。

「毎度あり。あと、アルコールが抜ける前に薬は飲まないでください。副作用が出ますから」

箱を開けてマスクをつけていると、理津子が店の方に出てくる。

「あらあら、先生。息子がお世話になっています」

「いえいえ、こちらこそ」

霧矢が出した薬を理津子はきちんと処方箋通りか確認する。霧矢は確認を受けて、薬を袋に入れていく。

理津子が松原に飲み方を説明するのを横目で見ながら、霧矢は換気扇のスイッチを入れる。先ほどの飛沫でうつされてしまったのは、クリスマスが台無しになってしまう。備え付けてある消毒液を両手に念入りにこすりこんだ。

「ところで、うちの子、無事、薬学部に行けるのでしょうか？」

霧矢の動きが止まる。成績のことを突かれると、霧矢としては返しようがない。

「数学に限って言えば、今のところ、大学を選ばなければ可能でしょうね。でも、まだ一年生ですし、これからの努力次第というところでしょう」

かすれた声で、そこそこまじな評価をもらった。霧矢は息を吐いた。

「三年生は、センター試験直前で忙しくなってますし、霧矢君も三年生並とは言いませんが、そこそこ頑張ってもらいたいものです」

「……頑張る……か……」

「そうだ。頑張れ。すべてはお前の努力次第だ」

グーサインをすると、薬代を支払って松原は出て行った。

「ありがとうございます。お大事に」

理津子は再び、家の方に戻っていく。霧矢はカウンターに座り、英語の課題に戻った。

(……冬休みか……こんなに宿題出されて休みとかふざけた話だな)

高校生とは割としんどいものだ。浦沼高校はどちらかというと進学校で課題がやたらと多い。中学校の時も友達はみんな敬遠して、隣の高校に行ってしまった。浮かれて町で遊んでいる高校生を見ると、一抹の羨望があったりするのだが、店の跡を継ぐためには、大学に行かなければならない。

もともと、この薬局は、もう二人とも亡くなっているが、霧矢の父方の祖父母が始めたものだ。祖父は先代の隣の診療所の先生と旧知の仲だったらしく、一緒になって診療所と処方薬局を始めたそうだ。霧矢の父親は二人兄弟の弟で、兄は跡を継がずに家を飛び出してしまい、完全に絶縁状態となっている。父親も大学の薬学部に行ったのはいいのだが、薬剤師になるよりも創薬の研究の方が好きになってしまい、店を継ぐのを拒否した。結局、今や薬学部の准教授

で、現在、海外の大学で研究している。

父はそれで危うく勘当されかけたが、父親は祖父母に妥協案を提示した。

実は父、淳史は大学時代にある女性と付き合っていた。彼女も同じ薬学部だったが、研究職ではなく、薬剤師を目指していた。そして大学院を修了すると、二人は結婚した。つまり、理津子を跡継ぎにし、自分は大学での研究を続けるということを提示した。

祖父母も目的は後継者だったので、その案を受け入れ、結局、今のように理津子が薬局を仕切っている。そして、息子である霧矢は店の手伝いをしている、というわけだ。

（……しかし、何というか……いい天気だな……）

外を眺めれば、穏やかな日差しが路面の雪で反射され、キラキラと輝いている。しかし、週間予報によれば、この天気は長くは続かないらしい。明日からまた西高東低となり、日本海側は荒れてきて大雪のクリスマス・イブになるらしい。

（……まあ、こんな田舎じゃ、クリスマスつっても大したことないしな……）

いい天気だというのに、表通りの人気はまるでない。もつとも霧矢の家とスキー場は駅前通りをはさんで反対の位置にあるので、こちらに観光客は来ない。

時計を見ると、隣の診療所が閉まる時間だった。霧矢は課題のノートを閉じて家に戻る。

「霧矢。結局、冬休みの宿題ってどれくらいなの？」

「聞かないでくれ。さっき嫌な気分になったから」

二人で昼食をとりながら、霧矢はこたつ上の板とにらめっこする。霧矢の夏休みは地獄だった。しかし、期間が長かった分、何とか終わらせることができた。しかし、この休みは短く、課題の量は夏休みと大差ない。

ふと思いついて、携帯電話を取り出し、西村にメールをする。

お前、課題終わると思う？

ふう、と息を吐いて、霧矢は昼食に箸をつける。まあ、課題は多いとはいえ、冬休みは冬休みだ。楽しんでいこう。

クリスマス前の平穏と不穏 3

「へえ、晴代って結構料理上手なんだね」

「晴代から料理とスキーを取ったら何が残るのか……私は恐ろしくて考えたこともない」

「悪かったわね。でも文香の料理なんて食べられたもんじゃないし」
昼時の上川家では、晴代が家の台所を使って昼食を作っていた。

喫茶店もそれなりに人が入っている。店で働いている両親の分も晴代は作って届けているらしい。

「晴代もダメだというし、三条に至っては完全な拒否反応を示す。いつたい私の料理の何がいけないのか、ご教授いただきたいものだ」
「文香は材料をこっちで用意すれば結構上手いんだけどね……自前で用意させると何を入れるかわかんないし」

これは霧矢と晴代しか知らないことだが、文香は料理をするとき、実験室で化学的に合成した調味料を入れることがある。ベンゼンからサッカリンを作ったり、アルコールとカルボン酸から硫酸を使って香料を作ったりする。市販されているものなら良いのだが、彼女は一から作ってしまう。しかし、途中のプロセスで加える化学物質の効果を考慮しないため、霧矢は彼女の作ったものを食べて死にかけたことがある。

文香は、料理自体は上手いのだが、変なものをに入れてしまうのだから、文香に料理をさせるときは食材を誰か他の人が用意しておいた上で、見張っていなければならない。

「霜華ちゃんも上手だよ。割と手馴れてる感じだよ」

「まあ、風華の世話は私がしてたからね。両親はずっと行方不明で私が母親代わりだったから」

晴代と文香は意外そうな顔をした。

「あれ、霧君から聞いてないの？」

霜華としては、もうとつくの昔に霧矢が話していたものだと思う

ていた。

「霧矢は、ああ見えて人の立ち入った事情を他人にはそう簡単には話さないからね。まあ、だから学校でもそれなりにみんなから信頼されてるんだけど」

「晴代の趣味も含めてだがな」

「あれは別。霧矢ったらいつもネタにして脅してくるし……」

晴代はイライラした顔立ちで乱暴にフライパンをかき回した。一人料理から外されている文香は暇つぶしがてらに上川家の冷蔵庫の中を覗き込んだ。

「晴代、ダイエツトしていたとか聞いたが、糖分だらけだぞ」

ギクリと晴代の背筋が動く。

「何、人の家の冷蔵庫を勝手に漁ってるのよー！ バカー！」

半泣きになりながら、文香に抗議した。霜華は苦笑いしながら先ほどの話題に戻した。

「霧君にはもう話したんだけど、実は私、結構昔から親と会ってないんだ。二人ともどこで何をしているのかさっぱり見当がつかないけど、それでも、まあ少し前までは風華と二人でまわりの人に支えられながら、やってきたんだよ」

文香は冷蔵庫を閉め、腕組みした。

「……向こうにいられなくなったからこっちに来たのだろうが……それは何なのだ」

ふう、と軽く息を吐くと霜華は霧矢に話したことをもう一度口に出した。文香の表情が曇っていく。晴代も黙ったまま聞いていた。

「それは、いろいろと難儀なことだったな……」

「まあ、でも、もうこっちの世界なら安全だし。昨日みたいなこともよほどじゃないと起きないだろうしね」

「私も、ケガが完全に治っていたら霧矢を助けに行けたんだけどね

……」

晴代はまだ治りきっていない腰をさする。

数日前に、雨野の暴走を止めようとして、晴代は実力行使に出た

のだが、完全に相手の実力を過小評価していた。見事に返り討ちにされ、全治五日間ほどの打撲を負ってしまった。今も晴代の体の背面には湿布が列をなしている。

霜華と二人、契約主とハーフの二人がかりで一人の普通の人間を襲撃したにもかかわらず、晴代は完全ノックアウト、霜華もあと一步のところで倒されるところだった。このことから、浦高の生徒会長の腕力は反則級であることをうかがわせる。

ちなみに、風華は彼女の物理戦闘力に惚れ込んでしまい、初対面にもかかわらず、霜華と同じくらい彼女になついてしまった。

「完成！ さあ、みんなで食べましょー！」

皿に盛りつけて、リビングのテーブルに置く。みんなで「いただきます」と言う箸をつけ始める。

「うん。やはり晴代の料理は安定している」

文香がぼそりと褒め言葉を口にする。晴代は「もつと褒めてくれないのに」と不満そうだ。もともと文香は感情を大っぴらに表現しないので、晴代としてはもう少し明るくなってもいいんじゃないのか、とも思っている。

「霜華ちゃんのも結構おいしいよ。霧矢は幸せ者だねえ……」

晴代がわざとらしく、渋い顔をする。どうやら、二人の料理の腕はほぼ互角と言ったところだ。文香も霜華の作った料理を食べ、うんうんとうなずいている。

「そろそろ、お昼のニュースの時間だねえ。ちょっと入れてみようか」

リモコンで晴代はテレビのスイッチを入れた。地元のテレビ局の中継が入っている。

「宮内さん？ そちらの様子はどうですか？」

「はい。今日のアーケード街では、クリスマス・イブを明後日に控えて、デパートや専門店がクリスマスギフトやお歳暮の大商戦を繰

り広げています』

液晶の向こうでは、土曜日ということもあって、子供連れの親子でにぎわっていた。防寒具に身を包んで街を歩く人の群れが、リポーターの後ろで行き交っていた。

「ふむ。今年もそれなりに活気づいているようだな。良いことだ」
「よかったね。でもさ、このアーケードってずっと前に事故が起こってなかったっけ？」

晴代が文香に何のこともないひょうきんな口調で問いかけたが、霜華はピクリと動いた。

「あれは本当に残念な事故だった。亡くなった人も多かったはずだ」
文香は悲しげな眼をしてコップの水を飲んだ。

「事故……ってまさか、ガス漏れの事故？」

「何だ。知ってるんじゃない。こつちの世界の事情にも結構詳しいんだね」

霜華はつい暗い表情になる。二人とも何かあることを察したようだ。

リリアンが復讐を誓ったのはあの事件がきっかけだった。公式にはガスの漏出事故として扱われているが、実際はカルト教団が魔族の力を利用して起こした無差別テロ事件だった。8年前のクリスマス・イブに魔族の力の実験台として、東京ではなく、わざと中規模の地方都市を狙って起こしたのだ。リリアンの家族はそれに巻き込まれて全員死亡した。

教団の力は強く、マスコミに隠蔽をかけた上、警察も魔族の力という非科学的な現象を前に何もできなかった。犯人らしき男は見つかったが、何の立証もできず結局無罪放免という結末だったらしい。それすらも情報操作であり知られていない。

そもそも、その教団自体が存在をほとんど知られていない。霧矢や有島すら知らなかった。しかし、裏世界の情報筋を駆使して、リリアンはあの事件の真相にたどり着いた。

そして、明後日、事故が発生したまさにその時刻に復讐として、魔族の力を用いて、教団の関係者を始末すると宣言した。

霜華としては、殺しに嫌悪感を抱いているため、あまり賛成できなかったし、協力も拒否した。その結果、昨日の騒ぎになってしまったというわけである。

しかし、つい数時間前に、リアンの契約魔族、エドワード・リースは、あの教団がまた何か犯罪を企んでいるという情報をつかんだと語っていた。そして、その防止のために彼らを殺しに行くとも霜華としては、もはや殺しは嫌なのだが、彼らが何かを企んでいるから罪なき人を守るために殺すというのを否定する資格はない。彼女も風華や仲間を守るために何百何千という敵を殺し続けてきたからだ。

「へえ、あの事件って事故じゃなくて、犯罪だったんだ……」

晴代が険しい顔をする。手で握っている湯呑み中のお茶が熱せられて沸騰しボコボコと音を立てた。文香も犠牲者に黙祷するように目を閉じている。

「私たちは、あの時まだ小学生だったから、はつきりと覚えてはいないのだが、外人の死亡者はいなかったと思うのだが……」

文香や晴代はリアンを直接見たことはないのに、名前から外人だと思っているようだ。

「彼女はどう見ても日本人だよ。日本語も流暢に話すし、明らかにあれは偽名でしょ。復讐者としてのね」

「そうなんだ……」

「無差別に狙われて家族を皆殺しにされたのだ。復讐したいという思いを責めるのは酷というものだ。私としては称賛できんが、批判もできんな」

文香がお茶をすすりながら遠くを見るような目つきでつぶやいた。「しかし、連中がまた何かしでかすかもしれないというのは恐ろしい話だ。止めるために殺すというのもまた恐ろしい話だが……」

「でもさ、警察が入っても権力がらみでダメになるし、何かしでかしたところでまた無罪放免になっちゃうだけだし……」

晴代も困った顔を浮かべている。

三人ともため息をついた。

クリスマス前の平穏と不穏 4

「よかったですね。無事、明後日には退院できるそうで」

浦沼から電車で一時間弱、人口三十万人ほどの地方都市では、三人の女の子が町を歩いていた。二人は高校生ほどもう一人は小学生から中学生くらいだ。

「……………どうかしましたか？」

セミロングの髪に優しい顔立ちをしている女の子は、吊り目のショートカットの女の子に心配そうに声をかけた。

ハツとして、彼女は我に返った。

「……ああ、私って今、幸せだな……………ってね」

ニコリと微笑みながら、雨野光里は有島恵子に返事をする。彼女の左手を握っている女の子、北原風華に「ありがとう」と言った。

雨野光里の弟である雨野護は、何者かにかけられた呪いと自身の契約異能の効果が不運なことに相乗効果を起こし、長い間眠り続けていた。その後、雨野家は両親が不和となり、彼女一人だけが家で暮らし、両親は別居しているという事態になってしまった。

彼女は呪いを解こうと奔走し、紆余曲折の後、偶然ではあったが風華と出会い、契約。発現した契約異能の解呪・癒しの風を操り、無事に護の呪いを解くことができた。

そして、今はその病院の帰り道である。霧矢と霜華は店があるからと先に帰ってしまい、三人で電車が出るまでの時間、駅ビルの中をうろついていた。

「やっぱり、クリスマス前だけあって、人も多いですね」

駅ビルの中は、クリスマスソングが流れ、テナントもクリスマスツリーやモールで覆い尽くされていた。コートに身を包んだ家族連れが楽しそうに服や贈答品を選んでいる。

「今年は、去年のクリスマスがアレだった分、少しは楽しめそうか

な」

「護君が退院しますね。ただ……」

有島は言葉を濁す。雨野は気にもせず言葉を引き取った。

「親がすぐに戻ってくる可能性は低いかな。ただ、二人だけでも楽しいと思うけど」

笑みを浮かべながら息を吐いた。有島も微笑む。

その時、雨野のポケットが振動した。携帯を取り出すと、画面には役立たずの方の副会長の番号が表示されている。

「はい、私よ。何か用？」

「西村から聞いたぜ。やつと問題が解決したんだってな」

「雲沢。あんたそんなことを言うただけに、私にかけてきたってわけ？」

電話の相手は雲沢誠也といい、県立浦沼高校の副会長である。が、役員としての器量は、下級生である霧矢や西村と比べてはるかに劣る。ただし、肉体の再生力だけは半端でなく、ターミネーターのごとく雨野の攻撃を受けてもすぐに回復し、生徒会室から追い出されても確実に戻ってくるのである。

「まあ、そう言うなって。それならばそれでおめでたいことじゃねえか」

「あんたに祝われたくはないわよ。幸せが逃げていきそう」

「く」。言ってくれるじゃねえか。その毒舌に乾杯」

「今度こそあの世に送りたい？ あんたの知能はサル以下だけど、野生動物だったら人間以上に危機回避本能があるはずだけど？」

電話越しにソフトな暴言を吐いている雨野を通行人は避けている。脇に立っている有島は居心地が悪そうに苦笑いを浮かべていた。

「風華ちゃんはおなかとか空いてないですか？」

話している雨野を横目で見ながら、有島は問いを發した。

おずおずと、うん、とうなずくと、有島はにこりと笑いで返した。風華も有島には同じハーフ同士で何となく気も通じているのだろう。「とにかく！ これ以上いちいち電話をかけてくるんじゃない！

メールでいいから！」

息を巻くと、雨野は電話を切った。イライラした表情でため息をつく。

「雲沢君ですか？」

食卓にあれほど出さないでと言ったものが出てきた時のような顔で雨野は首を縦に振った。

「それよりも、風華ちゃん、おながが空いてるようです。どこかに入りませんか？」

賛成、と短く答えると、雨野は風華の手を引き、喫茶スペースのあるパン屋に入った。

パンと飲み物を買い、三人は席に座った。

「ところで、私はよくわからないのですが、護君はいつたい誰と契約したんですか？」

カプチーノに口をつけながら有島は質問する。

有島と風華は水を差すのも悪いと思って、雨野が帰ると言い出すまで護の病室には入らなかった。二人とも最後に一度だけ雨野に紹介される形であいさつしたが、それ以外は護とまるで話していない。

「えっと、闇の魔族でユリア・アイゼンベルグとか言ってた」

「闇のユリア・アイゼンベルグ……どこかで聞いたことある名前のような気がする……」

風華が思い出すような顔つきで声を出した。戦いときはともかく普段は、どこか子供っぽい一面のある霜華とは違って、風華は何となく思慮深いイメージを醸し出している。

「聞いたことあるの？」

「でも、どんな人か思い出せない。どこかでうわさを聞いた気がするんだけど……」

コッペパンをちぎって口に入れる。頭を振ると、

「これ以上は考えても多分思い出せない。それよりも、何でその人は契約主を放って、行方をくらましてるのかわからない」

残念そうな口調で風華はかつて姉が抱いた疑問と同様の問いを發する。

「私もそう思います。基本、契約魔族は契約主と近い関係にある方が都合がいいはずです。それなのに、どうしてずっと離れているのか……」

「でも、契約が自然消滅してないってことは、お互いに信頼はあるわけでしょ？」

ミルクティーをすすりながら、雨野は首を傾げる。

「ええ。お互いの信頼は続き、しかも、まだ彼女はこちらの世界にいる。まあ、いろいろ聞いた話では、向こうに戻るのは相当危険なことでしょうが……」

風華は残念そうにうなずく。今向こうは虐殺が現在進行形で繰り広げられている。

「護の契約魔族は、何のためにこっちに来たのかよくわからない。向こうが大荒れになったのは護が倒れてしばらくした後のころだから、私たちがみたいに戦いから逃げてきたわけじゃないと思う。でもそれだったらわざわざ魔力切れを起こす危険と隣り合わせなのに、何でこっちの世界に来たのか、と私は変だなんて思う」

氷の入ったオレンジジュースをストローでかき回しながら風華は続ける。

「多分、今私が思ったことは何かの核心につながっていると思う。でも、嫌な予感もする」

「嫌な……予感……ですか？」

不安そうな表情で有島は風華の顔を覗き込んだ。

「何となくだけど、またそれで誰かが亡くなったりしそうな気がする……」

初めは冗談だと思ったが、雨野も有島も風華の声から本気でそう思っているのだとわかった。昨日まで修羅に身を置いていた子だ。流血の予兆については敏感で当然かもしれない。

「まあ、契約魔族がどうであれ、呪いが解けたのならそれでもいい

だと思いますよ。別に契約を意図的に解除しなければダメージを負うことはありませんし」

「……ユリア・アイゼンベルグねえ、どこの誰なのか……」

フレンチトーストにナイフを入れている雨野はひねり出すような声を出した。

いずれにしても、まだまだよくわからないことは多かった。

クリスマス前の平穏と不穏 5

課題が終わる見込みは、多く見積もって三割くらい。きつと終わらない（涙）

霧矢が振動した携帯電話を見ると、西村からメールの返事が来ていた。霧矢も取り組んでいたのだが、課題の総量を冬休みの残り期間で日割りにしたら、余計に気分が沈んだ。

正直、先生は鬼だ、と。

（こんなもん、終わらせられるのは木村くらいだな……）

プリントを一枚終わらせると、霧矢は参考書をレジカウンターの上に放り出した。

目を閉じてしばし休憩する。まぶたの裏には昨日のリリアンの姿が浮かんできた。

（……結局、何がやりたかったのかはつきりしないな……復讐したあまり、脇が崩れてしまったと言うべきか……）

心地よい疲労感が眠気を誘う。霧矢はあくびをした。

昨日は西村のいびきのせいでほとんど眠れなかった。無理やり疲労をごまかしてはいたが、やはり来るものは来た。昼食を取ったばかりということもあって、睡魔に抵抗するのはきつかった。しかし、敢えて睡魔に抵抗する必要もなく。霧矢はなるがまま身を任せた。すぐに、薬局の中は寝息の音以外何も聞こえなくなった。

それが数分間続いたのち、いきなり薬局の扉が開いた。飛び起きるようにして、霧矢は客の顔を見る。

「いらっしやいませ！」

目をこすりながら、入ってきた人を見ると、身長一八〇センチほどの黒のスーツを着込んだ短髪の二十代初めくらいの男だった。

「三条霧矢だな？」

「は………」

「時間はあるか？」

いきなり妙なことを聞かれ、霧矢は狼狽する。時間ならあるが、いきなり初対面の相手に何か聞かれても即座に答えられるわけがない。

「え……ええ……」

男は懷から、写真を取り出した。

「申し遅れた。俺は、塩沢雅史という。とある探偵の助手だ。この少女の行方について追っている。知っていたら教えてほしい」

霧矢は写真を受け取った。流れるような金髪で、外見年齢は霜華と同じくらいで十代前半の女の子だ。しかし、霧矢はそんな子を見たことはない。

「何て名前の子なんですか？」

「名前ははつきりしない。身元もだ。だから俺たちは動いている」

重く厳しい口調だが、敵意というものはない。こういう口調の持ち主なのだろう。

「知りませんね。僕に外人の知り合いはいませんし」

「では、北原霜華は今、ここにいますか？」

「今はいませんね。友人の家に çık かけています」

「その友人とは上川晴代、もしくは雨野光里、有島恵子のことか？」

霧矢は警戒心を抱いた。明らかに、探偵ということを考慮しても知り過ぎているような気がする。それに、そのメンバーの羅列は明らかにある一点を明示している。

「その子、魔族が契約主なんですね？」

「……そうだ」

「何があつたんです？」

「君が知る必要はない。ただ彼女について何か知っていることがあれば教えてほしいと思ってここに来た。北原霜華はどこにいる？」

霧矢は少し苛立った。いきなり「君が知る必要はない」と言われ腹立ちまぎれに、

「僕が彼女の事情について知る必要がないなら、あなたも霜華の居

場所を知る必要はないと僕は思います」

と挑発的に答えてしまう。塩沢は息を吐くと、霧矢に詰め寄った。「君に得があるかどうかではない。これは下手をしたら人の命に関わる。エドワード・リースから話は聞いているはずだ。やつらが、また何かしでかそうとしていると！」

霧矢は、エドワード・リースという名を聞き硬直する。

「リリアンの仲間の探偵ってあなたたちのことだったんですね？」しばらく逡巡していたが、塩沢は首を縦に振った。

「……この話は軽々しく、誰かに話すことはできない。漏れてしまつたら、君たちが狙われることにもなりかねないからだ。だが、彼女がそれに関係している可能性がある。だから、少し前までむこうにいた魔族の意見を聞こうとここを訪れた」

霧矢は渋々、携帯電話を取り上げようとした。しかし、塩沢は待ったをかけた。

「電話ではなく、直接会って話したい。北原霜華はどこにいる？」霧矢はため息をつく、母親に出かける旨を伝え、エプロンを外した。

「仕方ない。ついてきてくれ」

クリスマス前の平穏と不穏 6

「いらつしやいませ！ て、あれ、霧矢君じゃない、あれ、隣は親戚のお兄さんとか？」

「いや、ちよつとした用事だ」

喫茶・毘沙門天は昼時も過ぎ、さほど人は入っていないかった。

「すみません。晴代と霜華を呼んでもらえますか？」

「はいはい。ちよつと待っててね」

晴代の母親はコードレスの内線ボタンを押し、晴代を呼び出す。

塩沢は淡々とした口調で、ブレンドとだけ頼んだ。

「……エドワードは復讐の件で僕たちにはもう関わらないと言っていたはずなんだが……」

ぶすつとした顔つきで霧矢は不満を口にするが、意にも介さず、塩沢は外を眺めている。大物の雰囲気はあるのだが、人を怒らせやすいタイプだと霧矢は感じた。

「…話聞いている？」

「聞いている。ただ、答えるかどうかは俺が判断する」

霧矢には目もくれず、ただ、帰りのスキー客が道を歩いていくのを彼は見つめていた。霧矢はイライラするのを抑えて、霜華たちが来るのを待った。

「お待たせ。どうしたの？ わざわざ」

「どうしたも、こうしたも、こいつがお前に聞きたい話があるんだとき」

奥のテーブルに、文香、霜華、晴代の三人が並んで座る。塩沢は文香を見ると疑問の表情を浮かべるが、気にすることなく始めた。

「まず、自己紹介と行こう。俺は塩沢雅史。相川探偵事務所の助手だ。魔族がらみの事件を調べている。今日は聞きたいことがあってここに来た」

一枚の写真を三人の前に出す。

「この写真の女の子、魔族なんだが行方をくらましていて、しかも名前ははっきりしない。心当たりはないか？」

霜華は写真を受け取り、思い出すような表情を浮かべる。

「……どこかで見たことはある気がするな……でも、知り合いじゃない」

「見たことがあるなら十分だ。属性や特徴、どんなことでもいい。知っていたら教えてくれ」

「……イメージ的には土って感じがする……でも、それ以上はわからないな……」

塩沢は、残念そうにうなずくと写真をポケットにしまった。

「塩沢さん、あなた魔族でも契約主でもないよね。だったら、このクリスマス・イブは暇じゃないの？」

霜華がいきなり質問をかけた。塩沢は面白そうな表情を浮かべた。
「なるほどな。リリアンがどこまで話したのかは知らないが、ある程度の情報は知っているようだな」

コーヒーの香りを味わいながら、塩沢は目を細めた。

「まあ、俺は契約主じゃない。異能も持っていない。ただ、まあコインタクトに魔力分類器を仕込んであるから、魔族、契約主とその他の人間の区別はできるけどな」

しばらく沈黙が流れたが、文香が口火を切った。

「……探偵の助手と言ったな。だが、貴様から感じられる雰囲気は探偵の助手ではない。殺し屋、裏世界の人間のおいがする」

全員が文香を見つめる。塩沢はニヤリと笑うと、

「ご名答。相川探偵事務所というけど、実際は異能を使った何でも屋だ。ただし、それは魔族由来に限らない、人間の突然変異と言ってもいいけどな。もつとも、俺たちが気に入らない依頼は受けないが。今はリリアンの依頼を受けて、うちの異能組は明後日の準備で忙しい。だから、暇な俺がこの仕事を頼まれた」

まわりに人が誰もいないのを確認すると、塩沢はズボンのベルト

から何かを取り出した。

「！」

全員がビクリと身を震わせた。大口径の軍用拳銃が日の光を反射して光る。

「こいつは本物だ。そこらのヤクザが持っているようなものとは格が違う。俺は人身売買組織や麻薬の密売組織とこいつで渡り合ってきた。異能を持たない探偵メンバーとしてな」

ベルトのホルダーに戻す。

「安心しろ。こんなところでカタギ相手に使うほど、俺は人命を安っぽく思っていない。後、通報したところで俺は別にどうってこともない。好きにすればいい」

自慢する口調でも脅迫する口調でもなく、淡々と事実を述べる口調だ。霧矢は尋ねる。

「それで、教団は何をしようとしてるんだ？」

塩沢は黙っていたが、意を決したように話し出した。

「君らに聞こう。これを知ったことによって連中に狙われることになったら、自分で自分の身を守るか？ 家族が殺されたりしても耐えられるか？」

脅しじゃない、と塩沢は付け加えた。

全員黙ってしまう。エドワードも教団は残忍な手口を容赦なく使うと言っていた。このような状況で自分やまわりを危険にさらしかねない情報を得ることは、リスクの方が高かった。

「と、言うわけで、俺は話さない。あくまで俺たちは俺たちが良かれと思うことの下で動いている。一般人に危険が及ぶのはそれに反する」

最後に、リリアンと同じように電話番号を書き込んでいく。

「写真を一枚置いて行こう。何か彼女についてわかったことがあったら連絡してくれ」

おもむろに席から立ち上がる。

「ああ、それと、ここのコーヒーはこれまでの出会ったコーヒーの

中でも指折りの味だった」

机に代金を置くと、そのまま店を出て行った。

「何だったの？」

「僕に聞かないでくれ」

霧矢はせつかく面倒事が解決したのに、また変なことに巻き込まれかけているということでかなり落ち込んでいた。

机に顎をくっつけ霧矢は水平面から金髪の女の子の写真を見る。

脇には十一ケタの数字の羅列が書かれた紙片がある。同じことは繰り返すというが、それが事実なら、また霧矢は面倒事に巻き込まれてしまうことになる。

エゴイストをやめてやるとは言ったが、それは今回のリリアンがらみの事件に限ったことであって、それが解決した今、もう、さつさと元の面倒事からは徹底的に距離を置くエゴイスト生活に戻りたかった。

それだというのに……問題が解決してから数時間しか経っていないのにこの始末だ。

(……不幸な目に遭うもんだ……)

写真をつまみあげながらため息をついた。

「それにしても、あんな大きい拳銃を持つてるなんて……」

晴代が恐る恐るといった口調で霧矢に話しかける。文香もややびつくりしたようだ。確かにここにいる全員が本物の拳銃を直接見るのは初めてのことだった。

「もういいだろ。穏やかなクリスマスを過ごそうぜ……もうたくさんだ」

「……まあ、そうだね」

「そうだ。これ以上関わったらきつとろくな目に遭わないぜ。それよりはもう知らんぷり決め込んでゆつくりしたい。宿題だってんでもない量出てるし」

霧矢は机から顔を上げると、疲れた表情で外を見た。冬だけあつ

て日も短く、太陽は相当西側へ動いていた。

「ところで、雨野先輩はまだ戻ってきてないわけ？」

「なしのつぶてだ。もしかしたら、また変なことに巻き込まれてるんじゃないのか？」

「縁起でもないことを口にするな。これ以上変なことがあったら手に負えん」

霧矢はポケットから携帯電話を取り出す。正直な話、リアンの攻撃を受けて地面に叩きつけられたりしたが、よく壊れなかったものだと思う。値段は張ったがそれなりに頑丈なものを買っておいてよかったと内心では思っていた。

画面から雨野光里の項目を選び、霧矢は通話ボタンを押す。短い電子音が鳴ると、やや機嫌のよさそうな声で電話に出た。

「もしもし、会長ですか。三条です」

「何か用？ もう少ししたら電車に乗るから、用件があるならさっさと行って」

「いや、面倒事に巻き込まれてないならそれでいいんです。帰ってきたら、風華を連れて、喫茶・毘沙門天まで来てくれますか？」

しばらく話すと、珍しいほど明るい声で了解、と言い、雨野は電話を切った。

「どうだった？」

「これから電車に乗るってさ。そのうち来るだろ」

晴代は店に貼ってある、地元の時刻表を見る。うきつきとした表情で「あと五十分」とつぶやいている。そんな彼女を横目で見ながら、

「なあ、木村。晴代は課題終わると思うか？」

小さなヒソヒソ声で霧矢は姿勢を低くして尋ねた。

「私は無理だとは言わない、そこは友を信じたい。しかし、厳しいとは思う。残念ながら」

顔をしかめて、文香はゴロゴロ声で霧矢の耳に返事をした。

横を見ると、アホ女が楽しそうにモップをかけている。お気楽な

女がある意味うらやましい。霜華は塩沢の持った写真を何かを思い出そうとしている表情で見ていた。

「どこかで見たことあるんだよう……………」

「もういい。これはほっとけ」

霧矢は写真を取り上げ、ポケットにしまった。塩沢の電話番号のメモ用紙も同じくしまう。

「しかし、あと一時間ほど何して過ごす？」

「課題をやるべきと私は提言する。晴代、参考書の貸し出しとルーズリーフを何枚か所望する。それと、晴代もやることを勧める」

眼鏡を光らせながら、文香は晴代をにらみつけた。晴代は一步步。

「了解。じゃあ、勉強会ってことでいいな。ひとつ走りして宿題取ってくる」

霧矢の家と晴代の家は往復しても五分かかるか、かからないくらいにすぐ近くの場所にある。霧矢は喫茶店から飛び出した。後は女子三人組が残された。

「ねえ、文香。何でせっかくいい気分なのにそうやって水を差すの？」

晴代が口を尖らせて文香に食ってかかるが、文香は苦々しい顔で晴代の頭を殴る。

「中学校の時から私はいつも長期の休みになると付き合わされた。今年こそはそれが無いことを望んでいるからだ！」

「はい……………」

不承不承、晴代は不満そうな声で返事をした。三人で喫茶店から家の方に戻り、机の上に問題集が並んだ。

「結構多いんだねえ……………浦高って」

「そうだよ……………先生はイジワルとしか言いようがないのよ」

わざとらしく涙ぐむ。文香はため息をつき、ルーズリーフを取り、

参考書を開いた。

「まったく、この程度で先生をイジワルなどと呼ぶのはいささか、私からしてみれば、甘いとしか思えないのだが」

課題の範囲のページをパラパラとめくり、文香は呆れたようにつぶやいた。霜華も問題集をめくってみると、それなりに簡単という感想を漏らした。

「ちよつと、二人とも何でそんなにあたしを傷つけるようなことを言うのかなあ……」

晴代が泣き言を言っていると、課題の入った袋を持った霧矢が上川家の居間に入ってきた。

「相変わらず、綺麗な家だな……」

「霧矢ああああ！ 二人があたしをいじめるんだよおおお！」

「だ・ま・れ！ だったら日頃の自分の暮らしを見つめ直せ！」

「霧矢までそんなことを言うわけええええ？」

四面楚歌、いや、三面楚歌の状況で晴代はノートを開いた。霧矢は今更になってあることに気付いた。

（……霜華の子供っぽさやアホさに早く慣れることができたのは、こいつの存在が大きいな。こいつの方がはるかにヒドイ。こいつに慣れてしまっていたからだ）

霧矢も椅子に座り、教材を開く。

「それじゃ、会長が来るまで勉強会スタートだ。とりあえず、お前は僕たちに頼る前に、自分で何とかする習慣をつける」

霧矢の言葉に文香も霜華もうなずく。晴代は暗い表情で渋々同意を示した。

全員が黙々と課題に取り組んでいる中で、霜華は適当に公民の教科書を読んでいる。こちらの世界のことをそれなりには知っているとはいえ、まだまだ世間のことには疎かったらしく、興味深そうな表情を浮かべていた。

「ねえ、文香……」

「何だ」

開始三分にして、さっそく質問が始まった。文香は身を乗り出して、晴代のノートを覗き込んだ。しかし、表情が固まる。

「この問題のどこがわからないと言っただ」

「ねえ、そんなわかって当然みたいな口調で言わないで。あたしは本当にわからないんだって」

くどくどと説教しながら文香は説明していく。霧矢も覗き込んでみるが、明らかに基礎中の基礎問題だ。解けない方がどうかしている。

全員がため息をつく。晴代の成績はここ数日のうちに急落してしまっただけ。いや、もともと下がりようにもそれほど下げ幅を残していなかったのも、急落という表現はおかしいかもしれない。しかし、この状態を危機と思わない晴代もある意味では大したものだった。

「ねえ、逆に聞きたいんだけど、何でもみんなはそんなに勉強できるわけ？」

霧矢に対しては多少嫌味だが、霧矢の成績は学年平均より少し上で、晴代よりは格段に上だ。その少しだけに西村、学年トップクラスに文香がいる。そして、霜華も高校でやっている内容は普通に理解していたようだ。

「普段の積み重ねだ。お前が授業中下らん妄想にふけったり、家でつまらん趣味に時間を費やしたりしている間、みんなはちゃんと勉強してたんだ！」

ビシッ！ と晴代に霧矢は指を突きつけた。文香もうんうんとうなずいている。

晴代は言い返せず黙ったまま、次の問題に進んだ。

そのまま、問題を解き続けていると、上川家の呼び鈴が鳴った。

晴代が応対に出ていく。

「きゃー！ 何てかわいい子なのー 抱きしめたーい」

晴代の黄色い声が玄関の方から響いてくる。霧矢は机に突っ伏し

た。

「面倒事はごめんなんだ……さっさと元の生活に戻してくれえ……」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4900z/>

Absolute Zero 2nd

2012年1月8日22時52分発行